

変色しないスギゴケ「富士山みやび苔」

奇麗な状態を維持

【静岡支局】富士宮市などでコケ約2.2畝を栽培するのは、株式会社モスファームの北條雅康さん(36)、星恋梨さん(29)夫妻。10品種以上を栽培する中、日本で唯一変色しないスギゴケ「富士山みやび苔」が主力商品となっている。

(株)モスファーム
静岡県富士宮市

約20年前、雅康さんの父で現会長の北條雅教さん(75)が、購入者からスギゴケの変色について相談を受けた。庭に植えたスギゴケが3年ほどすると茶色に変色してしまうというものであった。そこで、この変色を防ぐための研究を開始。大学院でコケの研究をしていた雅康さんの研究知識と雅教さんの栽培技術で、20年の時を掛け「変色しないコケ」の開発を成功させた。約5年前、雅康さん夫妻がモスファームを受け継いだのをきっかけに「富士山みやび苔」としてブランド化した。

雌株だけの園地造って栽培



富士山みやび苔の圃場

スギゴケの繁殖方法は、一つの個体が単独で新たな個体を生成する「無性生殖」と、雄雌の交配で繁殖する「有性生殖」がある。通常のコケが2〜3年で変色してしまう原因を雅教さんが検証した結果、有性生殖によるものだと突き止めた。雌株だけを別で栽培すると、変色しないことが判明した。

手作業で丁寧な

さらに、雅康さんの研究で植え付けから約5、6年という長い栽培期間に自然災害や病気から守りながら栽培する技術をつくり出した。雄と雌が別の株として育つ雌雄異株のスギゴケは、雌雄を見た目で区別することが可能だが、

雌株だけを抜き取り、雌株だけの園地を造るには、多くの時間と労力が必要となる。モスファームでは雌株だけの園地を造って栽培する。「湿気に強いと思われがちだがコケだが、実際は雨や高温などの気象変動や自然災害には弱い」と雅康さん。収穫までの長い期間を、手作業で丁寧に管理している。

県外の寺院などにも出荷され、庭園に利用されている富士山みやび苔。雅康さんは「コケは変色のたびに剥がされ、捨てられてしまうことも多い。このコケならいつまでも奇麗な状態を楽しんでもらえる」と胸を張る。

さまざまな世代へ

「さまざまな世代の方にコケの魅力を伝え、富士山みやび苔を全国に届けていきたい」と話し、栽培規模の拡大に向け、新たな圃場の開墾を進めている。

また星恋梨さんは、催事販売やワークショップなどへ積極的に出店。「庭園用のコケはもちろん、テラリウムやコケ玉などを通じて、ぜひコケを身近に感じてもらいたい」と笑顔で話す。(城森)

富士山みやび苔の生育状況を確認する北條さん夫妻

